

第 100 回目の GIS News! です

慌ただしい師走、サンタクロースも七福神も大きな袋を背負って、ゆく年来る年の準備できっと大忙しでしょう。「どうか良い事いっぱい運んで来て、災いは持ち帰って」と願う年の瀬です。今回の News は 100 号です。2000 年 11 月の 1 号の発行から、皆さまに継続してお付き合いいただきまして深く感謝致しております。さて、今回は「庄内米」産地復活作戦に GIS を活用するという話題です。

リモセン・GISの明日を考える会

「庄内でのリモセン・GISの明日を考える会」は山形大農学部、庄内各JA、JA全農庄内が推進委員会を努めています。開発研究は山形県農業総合研究センター、東京工業大学、東北大学、防災科学技術研究所（川崎ラボ）が担当し、製品化する部分でFTLと当組合が関わっています。2006年には「生研センター（農水省）」に本格的な研究をする予算申請を行い、「庄内米」産地復活作戦を開始しようと計画中です。

GISで農産物トレーサビリティの構築

現在、消費者、流通業者の食品の生産履歴に対する関心が高まっています。情報提供の手段もインターネットや携帯電話、スーパーの端末機械などで生産者の顔や生産履歴が閲覧できるシステムを導入しています。しかし、米の場合は一粒が小さく、乾燥調製施設で複数のは場、複数の生産者の米が混合されるため、このような情報提供が難しいのが現状です。GISを使って、省力的でよりきめ細かな生産履歴を消費者サイドに提供するシステムについて研究開発を行う取組が行われております。トレーサビリティに対応するため「庄内米」を青果ネットカタログ「SEICA」(<http://seica.info/>)に載るシステムにすることも検討中です。なんと、SEICAの第1号は『鶴岡産の“だだちゃ豆”』でした。
(<http://vips.nfri.affrc.go.jp/material/press.html>)

今、消費者は安全で美味しい食料を探しています。生産者側も生産管理が容易で、安全で収益も上がる稲作を考えています。庄内米と言えば「ササニシキ」でしたが、現在の庄内の主力品種は「はえぬき」です。庄内地区の米の品質、食味の均一化を図り「庄内米」は美味しいとの評価を得るため、産地復活大作戦の戦略と戦術にGISを活用しようとしています。生産者のパソコンの普及率、利用頻度など、今後の課題も多くありますが、生産者と産学官の連携で開発研究がスタートしました。また、12月19日にJA全農庄内の主催で『農業GISの庄内での活用事例と運営方法について』の研究会が開催されます。2006年、庄内の農業GISにおおいに期待が持てそうです。

参考文献：山形県農業総合研究センター 小田九二夫「GISを使用した農産物のトレーサビリティの構築」

次回の GIS News!

次回は、2006年1月9日発行予定です。来年もよろしくお付き合いください!

Geographic Information System

記事：協同組合山形県地理情報センター 佐藤まゆみ 発行日：2005年12月5日



庄内平野、最上川、日本海
(2005.11.26 松山眺海の森より撮影)

